

甲南女子学園創立九十周年記念

女子高校生エッセイコンテスト

【最優秀賞】

中舩 茜

立教英国学院（英国）3年生

「コンサートマネージャーの苦悩」

コンサートマネージャーという仕事を知つ

ている人はどれくらいいるだろうか。私は自分がこの仕事に任命されるまで、存在すら知らなかつた。コンサートマネージャー、もと

い、雑用。私の学校で言うコンサートマネージャーというのは、年に3回行われるクラッシックコンサートの雑用すべてを引き受ける

仕事である。

6人という少ない人数で、必要な楽器や道具すべてを音楽室からステージ裏まで運ぶ。

その量と種類は暴力的に豊富で、半日かけて

運び終わる頃には翌日の筋肉痛が保障されて

いる。それからリハーサルを付きつきりで見
て、時間を計り、楽器を動かしつつ、それを
事細かにメモする。本番は、演奏が終わるご
とに、メモどおりにすばやく配置変えをする。
コンサートが終わると、出したばかりの楽器
をまたしまいに行く。みんなが寮に帰って寝
静まった頃何とか仕事を終えて、翌日の片付
けの続きに備えるのだった。
ひとまず女子のやる事ではない。はずだっ
た。なのに、私は選ばれた。紅一点といえ
ば聞こえはいいが、力仕事の中ではただの足手
まといだ。力がない分、ほかの事で挽回しよ
うとして走り回ると、疲労は簡単にピークを
越した。
つらい仕事にやりがいを感じる人もいるか
もしれない。でも、苦勞して楽器を出して、
しまうだけ。やり終えたって、ステージには
何も残っていやしない。努力に対してやりが
いが比例しない。仕事が終わって一人で女子
寮に帰ると、勝手に涙が出た。体が疲れると、

心まで弱くなつた。それくらい頑張つても、演奏者の中には存在すら知らない人がいたりする。志願したわけでもないのに当然のように扱われて、演奏者のために働いているのに見向きもされないなんて、何のために働いているのかわからない。自分も選ばなければ同様に存在を知らないまま過ごしていたと思ふと、恨めしい。男子達は、文句は言うものの気楽に仕事をしていて、自分が考えすぎなのかと思つた。そして、素直に働けない自分が嫌いになつた。誰とも共有できない疑問を抱えたまま、仕事をしていた。

何回目の仕事だつただろうか。コンサートが終わつて、ステージに残っている楽器を片付けようと出ていった時の事だ。まだ何人かお客さんが残つて、立ち話をしていた。気にせず取り掛かると、その人達がステージの方に近づいてきて口々に言つた。「最高のステージワークだつたわ」「連れて帰りたいくらい優秀だ」「素敵なコンサートを、ありがと

う」その瞬間、はつとした。演奏者をほめる事はあつても、私達をほめてくれたお客さんは初めてだった。うれしいのと同時に、その人達にあふれんばかりの笑顔が、暗い面持ちで働いていた私とあまりに対照的で、胸を打たれた。何のために働いているのか。その答えは今日の前にあつた。やりがいを求めているステージや演奏者の向こうに、本当の働いている意味があつた。私達の仕事は、お客さんを感動させる事。笑顔を作る事。コンサートを支えているのは、紛れもなく私達だ。笑顔で手を振って帰っていったお客さんを見送っているうちに、いつもとは違う涙がにじんだ。

相変わらずつらい仕事だ。だけど、私の心には支えができた。コンサートの時期が来るとまた筋肉痛かと思うけれど、その時の笑顔を思い出して、自分を励ました。

高三になって引退して、初めて観客としてコンサートを見た。なぜだか胸がいつぱいに

なつた。コンサートに純粹に感動した。そして同じ様に感動する観客を、笑顔を、私も作っていたのだという事実を、誇らしく思った。世の中のあらゆる仕事は、同じようにやりがいも見当たらないつらいものなのかもしれない。けれど、どんな仕事も、どこかで必ず誰かの笑顔につながっていると思う。これから先どんな仕事でも、やり遂げられる気がした。決して楽ではなかったけれど、この仕事は、私に大きな財産をくれた。